

「書翰并石州言上書写・法中同志并同行歎願書写・驗恩問答記・山縣今吉田村同取調書記外同行改心請書并冬夜独語」(二)の翻刻

小林 准士*

本誌に翻刻するのは、「書翰并石州言上書写・法中同志并同行歎願書写・驗恩問答記・山縣今吉田村同取調書記外同行改心請書并冬夜独語」写本一冊の後半である。いずれも筆者が古書店で購入した写本であり、このほかに関連する写本として「石国異安心御取札記」写本一冊(前号に翻刻掲載)、「山縣一件取調筆記并歎願書」一冊、「山縣一件落着記」一冊を架蔵している。

これら写本四冊はいずれも観月という僧侶が作成したもので、四冊とも「釈観月」との署名が表紙に記されている。

これら四冊の記録は、安政年間に石見国と安芸国山県郡で起こった異安心事件に関するもので、石見国迹摩郡上村願楽寺の雷震という人物が説いた教えや教化の在り方をめぐって、雷震に従う僧侶らと対立する僧侶らが争った内容や、取り調べについて書かれている。本願寺史料研究所が保管する西本願寺文書の「石見国諸記」や「安芸国諸記」にもこの事件に関連する記事が多く含まれていることを筆者は確認しており、幕末の当該地域で大きな問題となっていた事件であることが窺える。分量の多い史料であるので、本誌に分載するかたちで翻刻し

ていくことにしたい。なお事件の全体像解明については別稿を用意する所存である。

(凡例)

一、史料の翻刻に当たっては適宜読点(・)や並列(、)を加えた。
一、漢字の字体は、原則として常用漢字・人名用漢字の新字体を使用した。異体字についても原則として正字に改めた。また口述筆記独特の略字についても通常の字体に改めた。

一、変体仮名は現代仮名に改めた。
一、史料本文中の割注については〈 〉で括り表記した。

一、誤字・脱字等については原文通り記載し、(○カ)、(○脱カ)、(ママ)と注記した。

一、抹消箇所については■または□□、虫損等により判読難の文字は□□・「」などでその状態を記し、右側に()を付し(○カ)(判読難)などと注記した。

*島根大学法文学部社会文化学科

【史料翻刻】

乍恐奉言上口上覚

一、同国天河内村満行寺隠居心樹院殿義、兼テ教導方評判不善候ニ付、
近来面会ノ節寛々話合仕リ候処、全ク世評ノ如クシテ、其趣意ハ願
楽寺ノ信機秘事ノ破斥ヲ事トスルニシテ自ノ所立ハ信法秘事トモ申
度程ノ義、竟ニ相見ヘ申候、元ト其立義ノ意ハ機法ニ種深信^心就^レテ
六要師御釈ニ亦有等者顯所信事是則機法ニ種深信^心也トノ玉ヘルヲ
心得誤テ機法ニ種ノ信心ハ所信ノ法体ニシテ是能信ノコトニ非スト
謬解シテ云、無有出離之縁ノ地獄者ヲ撰取セントノ玉ヘル本願法体
ノ事也、教其ノ法体ヲ信スル能信ニ於テ地獄必定ノ者ナリト機ノ沙
汰ヲスルニ不及、唯此機ヲ目当ニ願力撰取シ玉フト無疑ニ信スル斗
也、然ルニ世人誤テ^能信ヲ談スルニ我機ハ地獄者ト深信シテ本願力
ニ乗スルト談示スルハ是非也、何者本願名号ノ仰ハ墮ル機ヲ我レ必
ス墮サス撰取トノ玉ヘル勅命之ニ無ヲ聞得ル能信ハ墮獄セス、必ス
往生決定ト安堵スル斗也、地獄必定ノ我身也ト云ハ如來ノ仰ヲ不聞
已前未信ノ機ノ事也、聞得一念ヨリ初テ墮獄ノ沙汰ハ捨テ往生一定
ヨリ外能信ナシ、尔ルニ願楽流ハ死ル迄ハ地獄者ト云、是御助
ト云可笑コト也ト、願楽ヲ破斥シテ唯極楽一定タル自義ヲ立セリ、
由テ問テ云、御文章御書等ニ我身ハ地獄ナラテハ趣ヘキ方モナキ機
也ト信シテ彼撰取ノ本願力ニ乗スヘシトノ御教示ハ云何ト云ヘハ彼
等ハ所信ノ法体ヲ示シ玉フニシテ能信ニハアラス、能信ハ斯ル願力
ヲ聞テ墮獄ノ沙汰ナク往生一定ト信スル斗也ト云ヘリ、又問、尤モ
信体ノ徳義ニ約ハ一念ノ当体正定不退ニシテ墮獄ノ機ニ非ス、併

シ夫ハ信体ノ徳益ニシテ機辺ノ知ル処ニアラス、無趣入ノ機辺ニ就
テハ臨終マテハ罪惡深重ノ故ニ斯ル造惡墮獄ノ機ヲ願力ニテ撰取ト
信シテ可^レルト云ヘハ、答云、信徳ヲ閣テ機斗リ汰^レスルト云ハ、
未信ノ機ノ論也、信心ノ行者ト云ハ信徳ニ就テ云ヘシ、然ハ是臨終
マテ惡業ハ造^レ共、其惡果ハ不^レ得故ニ墮獄ノ機ニ非ス、由テ煩惱
具足トハ云ヘシ、地獄者トハ云ヘカラスト立義シテ談シ、先年自国
東組法中、此義解ヲ信仰シテ強ク談示スル者^ニアリテ組内法中ヨリ
難破シテ混雜起リ、終ニ回心ノ一札シテ内済ノ事モアリ、是モ願楽
所談ト表裏ニシテ、願楽ハ唯造惡墮獄ノ機ノ沙汰ヲ殊トシテ撰取願
力ノ法ノ沙汰絶テ之^レ無ニ対シテ、此心樹院ハ法理法徳ノ沙汰ノミ
シテ趣入趣向ノ機辺ノ手元曾テ不談也、又願楽寺云、後生ニ向ヒ臨
ハ唯是地獄ヨリ外ナシト談シテ若不生者ノ願力ヲ絶テ不談、対^レ彼
此人ハ云、後生ニ向臨ハ極楽往生ヨリ外ナシト示シテ造惡流轉ノ機
情因果ノ沙汰ヲ嫌ヘリ、如是双方共自ラ非ナルコトヲ不知シテヤ、
互ニ争ヒ談シテ人機ヲ迷動令ル也、又同人云、信ノ一念ニ於テ歡喜
ヲ談スルモノアリ、是甚タ非ナリ、何者歡喜ハ是レ心身ノヨロコビ
ニシテ意業身業也、尔ルニ一念ノ信心ハ衆生ノ作業ニ不関モノヲ願
力ヲ聞テヨロコフ斗リノ一念ト談シ、ウレシキ外ナキ信心ト云ヘル
ハ、業行ヲ以テ信心ヲ語ルニシテ是レ非也ト云ヘリ、難問シテ云、
歡喜ノ義御尺一ナラス、衆生ノ業ニ不関信体ニ約シテハ已ニ能^レ発一
念喜愛心、又廣大難思ノ慶心ヲ顯ス一念トモ御釈シ、又信樂ノ御字
訓釈云云、又一念慶喜スル人トモノ玉ノ等ハ信ノ物体ニ就テ歡喜ヲ
示シ玉フト見ユ、是其所以ハ弥陀曠劫流轉ノ苦因果ヲ頓ニ断シテ淨
土ニ往生令^ンノ大悲回向ヲ聞得ル無疑ノ一念心広大難思ノ慶心喜愛

心ナラスシテ何ソヤト云へハ、答云、信体ノ徳義ニ存在スル歎喜慶喜ヲ示シ玉フコトニシテ、能信ニ歎喜アリト云ニアラス、其信体所有ノ徳義ニ移ラウレシト喜フハ已ニ意業ニ発動シタル相続上也、故ニ信体ニハ歎喜ヲ有スル故ニ歎喜スヘキノ信トハ云ヘシ、信心即歎喜トハ云ヘカラスト、又問、尔ラハ一念ノ信心トハ悲喜一ノ中何レ心ナリヤト云へハ、答云、悲喜ノ二ニ不関、唯無疑ノ一念也トノミ云云

右体立義ノ教導ニ付テハ聞及候法中所聞ノ人機ヲ察シテハ悲歎仕候ト云ヘトモ当人身分且ツ年臘ニ対シ候テ諫言致者モナク、又使令^(反カ)ヒ論詰ニ及候トモ他解ニ随順等ノ底意ニ無之間、外人モ唯悔テ陰ニテ評スルノミ也、尔ル処此度願樂寺弥異儀不正ト聞及ハレ候上ハ前條ノ次第二候間、勿論破斥ニ^(付カ)□テハ自義ヲ益々正意也ト増盛コレ有ンコト眼前ニ候、爰ヲ法中同志互ニ又悲歎仕居申候、依テ乍恐宜ク御賢察被成下候テ何卒 御殿御威光ヲ以御取収メ被下度候、左様無之候テハ今度一失相取り候テ随テ又一失起り候哉ニ奉存候、強然^(マ)爰ニ格別ニ奉歎願度候ハ、当人御取糺ノ為御召登モ被仰付答候へ共、其段ハ幾重ニモ 御用捨ノ御取斗ヒ可被下候、其所以ハ若御召登被仰付候ハ当人ハ兼而上京志願ニ候間、事幸ト還テ喜モ可有之候へトモ、当寺彼本坊満行寺手元院主ハ幼少ニテ無住同様寺内難治、勝手方必至^{○難治}折柄、同人隠居料サへ時々渡兼候風^(マ)勢、此御当人 御召登被 仰聞候テハ其支度可仕本坊大ニ迷惑ノ次第二候、元ヨリ華美ヲ殊トス当人ニ候へハ、容易ニ其支度不調、就テハ寺内混雜モ可差起、其上終ニハ肝心ノ御取糺筋モ如何様ニ推遷可申モ難斗候間、何分満行寺迷惑ノ段、御^(密)密被成下

候テ、当人御召糺ノ義ハ御宥免可被下候、就テハ乍恐 御取成ノ段愚存ノ俣ヲ奉言上候ハ当人教導方兼而達 御聴候上、御呵責ノ御書下、尚外西組法中ノ内或ハ栢谷村香善寺・温泉津村西楽寺^(兩寺)ノ内共エ申論シノ御添書共ニテ、追而 御差下遊シ候ハ、他法中ノ外聞ニ恥入、無上増長ハ有間敷シテ、追々々^(御マ)慎相止り可申候、然シ此ハ恐レヲ不顧、唯秘素ノ防方、拙考ヲ奉申上斗りニ候、此外当人 御召登ノ余ハ 御使僧 御使用可然様御殿向宜ク 御取成可被下奉希候也、

石州近摩郡大家本郷

明円寺

安政五年午九月

覈元花押

御本山

御用僧

御役所

(空白)

乍恐以書附奉歎願口上之覚

一、石州銀山料御宗意ニ付兼而異途区ニ相聞申候処、殊ニ近来不正意増長ニ及、或者異途在之様申来候人体、又ハ中路ニ迷候者不少候由ニ而甚以歎敷奉存候、然者急速ニ旧弊^改改不申候而者、近々心得違致増長候様成行奉対 御仏祖善知識様ニ可恐入事ト奉存候候ニ付、慨嘆之余リ無昇階、殊ニ不学愚昧之私不顧涯分有之、任之^(マ)言上仕候間、乍恐此段御賢察被成下、速ニ僧俗共ニ御正意ニ奉帰順一統

美敷法儀相統ニ仕候様宜敷御取成被下度奉願上候、以上

石州邑智郡銀御料鉦谷村

安政五年午七月 香善寺印

真道花押

御用僧

妙順寺様

川本組法中之内兩三ヶ寺の大家明田寺殿江送書状写

御頼申口上覚

十令般貴寺徒

御殿御召登之由御苦勞ニ奉存候、右御用

(空白)

乍恐奉歎願口上覚

一、近年來法義区ニ相成候哉ニ奉存、慨歎仕居候処、去冬芸州山県郡惑乱御取締之響合ヲ以当国茂御取締被為成下度奉存候処、当夏同志之内高善寺御召登之上願楽寺御取糺ニハ相成候趣き重々難有奉存候、然ル処高善寺帰郷之上承候得者、正不明白ニ被為仰渡候趣ニ御座候得共、追而御取締御沙汰有之候迄者委細不被申候、右ニ付世間之風評ニ者願楽寺勸方正義ニ而高善寺勸方不正之由ニ申來、又者高善寺願楽寺両寺共何モ正義之由ニ評判仕候而肝要之法義一途ニ難相成テ愚俗之面々大ニ迷惑仕候、老少不定之習ニ御座候得者、何共出格之以 御慈悲国方御取締之義一日茂急き御沙汰早急ニ被為成下候

ハ、重々難有可奉恐悅候、依而同志之者慨嘆之余リ惣代ヲ以テ歎願書奉差上候間、宜敷御取成可被為成下候、以上

石見国邑智郡

安政五年 同志惣代原村

午十月日 西福寺印

同出羽村

円乗坊印

御本山

御役人中様

乍恐奉歎願口上覚

一、近年当国内近辺御教導之振合自ラ異儀区之儀有之哉ニ奉存候、然共私共儀者兼而御文章改悔文之御趣意聴聞罷在候得共、家内之者共ヲ始、皆々常ニ苦慮致候者数多出來仕候而右御教導之御方々ハ自分正義之旨被申問候ニ付、何方ヲ以正義ト相定ル事モ愚俗之者共難弁甚迷惑仕、依之自然御法座參詣致候者モ追々減少ニ相成、甚以御法義衰微之致、扨々歎ヶ敷奉存候、然ル所去冬芸州山県郡法儀一条惑乱仕候早速御取締ニ相成候趣ハ御信心ヲ嫌而生涯不安心之法儀者弥不正義之旨落着仕候由伝聞仕候ニ付、左候得者御大切成御法義之事故、早々当国へモ御取締之御沙汰定而可被為在、若右等之御沙汰無御座候ハ、露命不定之身ニ御座候故、片時モ捨置難相成一大事ニ御座候得者、早々私共へモ右御取締御沙汰之程幾重ニモ奉願上度申合候所、当奉^上上村願楽寺御召登ニ相成、於御本山様御嚴重ニ御取糺被為在御座候趣重々難有奉存候、左候得者御召登之寺々帰郷ニモ相成

候ハ、明白之落着可承候事与奉存候所、九月下旬壹貳ヶ寺帰国被致

御役人中様

候得共、耽与明白之御沙汰有無一円不被申、且又世間一統申伝候所者、願楽寺申立之儀正義ニ而惣会所法談被仰付候様申者モ有之、又者願楽寺外為正義三ヶ寺御召登之衆中申立之趣意、終ニハ同儀ニ相成候条被仰渡有之候杯与申候者も有之候得共、御法儀之一大事左様之儀者有之間敷、明白ニ御沙汰無御座候而者、仍從來之通り異儀ニ而愚俗之面々如何様聴聞仕候而可然哉与弥増迷惑千万苦慮可仕、実ニ老少不定之習ニ候得者、甚以歎ヶ敷奉存候、依之何共可奉恐義二者御座候得共、愚昧之門徒同行合点仕候様、委細御嚴重之御沙汰早急ニ被 仰聞被為成下候事、偏ニ奉歎願候、此段宜敷被 仰上可被下候、以上

乍恐内々奉歎上候口上覚
一、当国鱒淵村高善寺御召登之処、御法義筋落着仕候由ニ而同寺帰郷被致候得共、只追而御沙汰モ可有之与斗被申候ニ付、兎角世間之評判数々御座候故、愚俗之者共弥増迷惑仕候事ニ御座候、何レ国方へ明白之御沙汰可有之事ニ御座候ハ、老少不定之身ニ候得者、一日モ急キ可申候事ニ御座候間、以御慈悲早々御沙汰御座候様、内々奉歎上候、以上

石見国邑智郡出羽村
安政五年 卍浄坊旦那原村 栄次郎印
午十一月日

石見国邑智郡浜田領井原村
安政五年 天藏寺旦那銀山料川下村

午十月日 講中 每右衛門印
同断同村 七良右衛門印

同国同郡阿須那西蓮寺

門徒井原村

講中 日高元卓印

同郡鱒淵村高善寺

門徒井原村

講中 野田雄右衛門印

御本山

同断同寺旦那
同郡和田村

繁 平印

旦那 原村

同郡鱒淵村高善寺

三兵衛印

同断同寺旦那同村

代五郎印

同断同寺旦那同村

善八郎印

旦那和田村

同国同郡原村西福寺

栄次郎印

御講中兼崎宗平印

御本山

御役人中様

恩問、信後造罪ノ時、是コソ墮獄ノ因トナルニ仏願ノ不思議ニテ消滅シ玉ヘハ、罪ハ往生ノ障リトナラスト憶想シテ可ナランヤ、

驗答、其憶想ハ尔ラス、信後ニ造惡ヲ詠メテ墮獄ノ因トナリトハ思ハス、

恩問、信後造罪ノ時、是コソ墮獄ノ因ナル等ト憶想シテハ宗意ニ害アリヤ、

驗答、答前ノ問ノ言中、仏願ノ不思議ニ助ケラレテ罪ハ消滅シ玉ヘハ、往生ノ障リトナラスト憶想スルハ可ナリ、但シ造罪ノ時はコソ墮獄ノ因ナリト云憶想カソヘハ宗意ヲ害スルナリ、

恩問、墮獄ノ因ト思ハスハ何ト詠ムルヤ、

驗答、御文章ノ上ニ我身罪ノ深キ事ヲハウチステ、仏ニマカセマイラセテトモ、我機ノ淺間敷ニ目ヲカケスシテトモアレハ我カ機ノ方ニ別ニ何ト詠ムルト云義ハナシ、

恩問、信後ノ懺悔慚愧ハ何ヲ詠メテ懺悔慚愧スルヤ、

前件ノ立敵一時ノ仮立ニ非候

安政五抄冬廿日於 三明山

問者 唯恩

答者 証驗

驗答、懺悔慚愧ノコト、マツ涅槃經ニ慙者自不_レ作_レ罪、愧者不_レ教他作、

慙者内自羞恥シ愧者発露シテ向_レ人、慚者羞_レ人愧者羞_レ天、是名慙愧ト説キ、又法相ノ所談心所五十一ノ中善心所二十一アリ、第三カ慙第四カ愧ナリ、ソノ余諸經論ニ説カ如シ、尔ニ今時ノ吾等如是ノ慙愧ノ善心ハ露塵モナキアサマシキモノ故ニ觀經下上下中ノ二品ニハ無有慙愧ト説キ、高祖ハ無慙愧ノコノ身ニテトノ玉ヘリ、尔ルニ今吾等超世ノ悲願ニ値ヒ奉リ、此機此法ヲ信スル故ニ其所信ノ法ニテラサレテ能信ノ機上ニ初發ハ勿論、信後ニ慙愧ノ心ヲ発シテ仏恩ヲ仰キ喜フナリ、尔レトモ凡夫ノ地体常ニハ無慙無愧ノコノ身ナリ、カ、ル造惡不善ノ身ナレトモ他力自然ノコトハリニテ折ニシタカヒ事ニ付キテ慙愧ノ心モ出テ来ルヘシ、故ニ歎異抄ニ回心ヲ釈シテ、回心ト云コト乃至心モ出クヘシ等トアリ、此ノ文ヲ以可_ニ准知_一、喩ヘハ明鏡ニ向ハサレハ我身ノ容儀ハ知レカタシ、明鏡ニ向フ故ニ初テ吾身ノ淺間敷キコトカ知レタルナリ、故ニ決定抄ニハ善導ノ般舟贊ノ文ヲ釈シテ曰ク、オホキニスヘカラク慙愧スヘシ、乃至無上ノ信心ヲ釈セリト云云、此レ今不共ノ回心懺悔ノ所談ナリ、通途聖道ノ所談ト異也、故ニ高祖ハ邪蜎奸詐ノコ、ロニテ乃至無慙無愧ニテハテソセントノ玉ヘリ、然ニ汝ハ我身ノ造惡ヲ詠メテ是コソ墮獄ノ業因ナリト徹底シテ思ハサレハ、_信後ニ慙愧心ハ起ルヘカラスト云、今家ノ聖教何レノ文ニ依テソノ義ヲ成立スルヤ、八十通ノ御文章ニ曾テ慙愧ノ言ナシ、況ヤ如是ノ義ノアルヤ、次ニ慙愧ノ義ハ善導礼贊ニ釈シ玉ヒ、高祖ノ和贊ニ和述シテ真心徹到スルヒトハ乃至ノタマヘリト云ヒ、御文章ニハ回心懺悔ノ心ヲオコシトモ、又無ニノ懺悔ヲイタシ一心ノ正念ニオモムカスハトモトタマヘリ、_{ノ脱カ}是レ見ヨ回心懺悔慙愧コトクク信心ニ約ス、マタ大師ノ念々称名懺悔ノ文、或ヒハ高祖ノ銘文ニ善導ノ銘文ヲ載セテ称

仏六字即懺悔ヲ釈シテ云シ玉フカ如キハ是ハコレ信後ニ約ス、当流相承ノ教旨已ニ如是、若コノ外ニ的証アラハ汝チ提ケ来レ、信後ノ造罪ヲ穿鑿シテ墮獄ノ因ナリト談シ、慚愧心ヲ勸ムルコト、近比耳ヲ驚スノ説ナリ、当流ニハ安心報謝掟ノ三則アリ、若コノ鴻則ニ依ラスシテ教示ヲ垂ル、モノハ規矩ヲ棄テ、方円ヲ尽繩墨ヲ捨テ、曲直ヲ正サントスルモノ、如シ、豈夫得ヘケンヤ、

午十二月廿二日書

一、問、二種ノ深信ハ教語ニシテ能信ノ相ニ非ス、ソノ典拠ヲ云ハ、六要ニ云シ玉フトノ御所立詳ニ承り度候

二、問、未受法已前ハ地獄必定、獲信已後ハ更ニ然ルヘカラストノ玉フモノ、已後ハ所作ノ造罪何トカ詠ムルヤ、

三、問、汝ハ獲信ノ人ナリト印可シ玉フモノ、出言ヲハナレテ何等ノ徴アリテ印可シ玉フヤ

右委曲承度候

午十二月廿日

問者 唯恩

答者 証驗

一、二種ノ深信ニ付キ機受ノ一念発得ノ処ニ二相歴然トシテアリト云義、委ク承り度候事、

一、信後ノ造罪ヲ墮獄ノ因ト談シ玉フ御義、委ク承度候事、

一、機法一体ノ義委ク承り度候事、

一、印可決定ハ言ノ上ハ許スケレトモ、其意ハ許サスト云義明白ニ承

り度候事、

一、今家円融ノ所談、法体ニ在テ談スルコトハ諸家ノ談スル処ナレトモ、機受ノ信ニテ之ヲ談スト云コトアリヤ否ヤト云事、

右ノ条々御意得ノ処筆記ニテ承り度所希也

午十二月二十日

心樹院

問者 証驗

答者 唯恩

(空白)

問者 大振

答者 教專寺

大振

問云、信シテ信功ヲ見ルト云テ爾ルヘキヤ否ヤ、

教專答云、文ニ信シテ信功ヲ見ス、行シテ行功ヲ見ストアルユヘ、信

功ヲ見ルト云ヘカラス、

振問云、文トハ何レノ文ナリヤ、

教專答云、何レノ文ト云コトヲ不覺ナリ、

振問云、文ハ覺ナキトモ義ハ仍リ左様カ、

教專答云、信スルカユヘニ參ルトハ云ハレス、ソレテハ信シ心ヘスカ

ル故ニ自力ニナルト心得申ス、

振問云、又勅命トハ言語ニアラワセハイカ、

教專答云、罪人ヲ助フソヨノ勅命ナリ、

振問云、御老僧モ同意カ、

教專答云、マア同意ナリ、

振云、夫テハ昨日御破斥ノ義ト同キニ相成ナリ、
教專云、ソフナルカイナ、

振云、拙寺杯ノハ御村内ニ旦那モ是アルユヘ、夫テハ残念ナルコトユ
ヘ、能々覺テ居玉フヘシナ、

教專云、承知致シ候、

右之趣キ聞人、高見村法泉寺也、

安政六戊未歲三月廿七日布施村西善寺也、御使僧様御止宿中宇津井村
教專寺徹真公、

兼テ異安心ト聞及ニ是アルニ付キ鱒淵村。高善寺ニ男大振善学公也尋問
被致、高見村法泉寺大行公聞人ニテ問尋相成候云云、

布施村西善寺ニ御使僧様御出ノトキ御随役マテ書附ヲ以テ申上申候、
其訊ハ高見村高福寺并ニ伏谷真藏坊ニテ異談被致候ヲ、法泉寺并引受
高福寺并同真藏坊承知聽聞被致候故、右之趣者曇雷公并拙僧承り候故、
此趣キ高善寺深マ堀師ヨリモ又直ニモ曇公并法泉寺大行公同拙モ申
上候事、三月廿六日ノコト也、尤拙ハ廿六日早朝ヨリ參り申候、此日
五ツ下り參着申ス、即座ニ大行公云、貴公モ示談スヘキコトアリト云、
其二後ニ出ル内ニ談シヌ、御使僧御巡寺ニ相成候処、都山組杯何ノコ
トモナク相濟候趣キ、甚以不宜候趣候、何トカセント拙者何分右貴寺
御存ノ八色等ハ言上可申テ宜シキニハ非スヤト云山、行云、サレハ曇
雷公ト昨夜ヨリ談居候カ、何分鱒淵高善寺ハ未タ不參カト云、拙、サ
レバ未タ不參ノヨシナリ、行云、サレ又々共ニハカラハント云テ畢言上セシ、
拙ハ御使僧ヘ御挨拶可申トテ出ヌ、行公モ別用ノ風情ニテ共ニ出、随

役善正寺ヘ右ノ趣段々申上候得トモ、善正寺云、一往御用相濟候
上ニテ御考ヘモアルコト故、コノ度御ツ、メ杯アリテハ却テ不穩コト
故、追テノコト、云ハレ候故、何分此度如行成共被成候様ハ申上候ヘ
トモ、色々ト申シ居ラレ候故六ヶ敷候、曇公モ知タル由云云、然シテ
書上シ言上書左ニ記シ置モノ也、

内々奉言上候

一、当度御宗意安心之儀ニ就芸州山県郡并当国銀浜兩領之内ニモ心得
違之者モ有之候故、大善知識様御深重御趣意難有奉感戴候、然ル
所ニ石組八色石村専光寺於高見村高福寺ニ法談之内、決定杯之
コ、ロエタト思フハ心エヌ也、心得ヌト思フカ心得タナリト云文ヲ
弁シテ、信シタト思フハツマラス、イツマテモ信ハトラレヌ、手本
ハ何ニモナヒト思フカ却ヘテ宜敷ト被申談候事ニ御座候趣、慥成人
体聽聞被致居候、尚伏谷村真藏坊ニ而茂同様成法談被致候趣ニ御座
候、実ニ出離永劫之一大事、殊ニ教示之身者自損損他之科不相成候
様為致度、如斯内々言上仕候、宜敷御取成之断マ奉願上候、以上

安政六年

未三月廿六日

御随役

善正寺様

同 正安寺様

右之通りニテ差上申候、下名前ニ付断差モツレ候処、随役云、西福寺
并真藏坊并曇雷三人蓮名ニテ差出可申様被申候事ナレトモ、其儀ハ
六ヶ敷儀故不出申、殊ニ又鱒淵村高善寺深涯師断、善正寺様御談示ア
リテ、名前ハ無シニテ差出申候事故、如此記シ置候者ニ御座候、

(空白)

山県郡異安心間略記

安政四巳九月廿日ヨリ始メ同廿三日ニ終ル

呼出ス場所山県郡本地駅専教寺

今吉田村百性源太郎 直右衛門 甚三郎 幾次 弁藏

引纏役組頭忠三郎 同組頭謙藏

護命云、其方共此度当寺へ呼出ハ余ノ義ニ非ス、当夏以来他国僧ニ帰依シ御宗意安心ノ一途ヲ心得違、其村葉王寺ト毎度口論致シ、人氣ヲ動シ、村方役元ニ在テモ殊ノ外心配ノ由ナレハ捨置難キ次第ニ付、先月十九日於当駅ニ宗判節法中示談ノ上当月三日御用掛リ専教寺ヨリ阿坂村安養寺ヲ以テ拙僧へ教諭ノ義申出ラル、依之 御本山へ御案内申上、御国法モ御聞濟ノ上罷越タリ、尔レハ御安心御取糺ト申ス義ニテハナケレトモソノ趣ヲハヨク聞調へ、教諭ニ及着納得^{着カ}不仕中ハ扨ナク 御本山へ言上致ス、幸ヒ 御使僧近日広島へ御下向アレハ言上致サハ定テ於仏護寺テ御取糺ニ相成ヘシ、尔ルトキハ容易ナラサルコトナレハ皆トモ心中ヲアリノ俣ニ申述、教諭ヲ受テ真実ノ御法義者トナルヘシ、必我情ヲツノルコト勿レ、

源太良

尋云、ソノ方義ハ石州簡居堂・当郡正円寺僧鑑・円立寺善浄ノ法談法話ヲ聴聞セシヤ、

申上候、三人トモニ聴聞仕候、簡居堂ハ当年四月上旬鈴張村称名寺へ請待アリシユへ、祖平夫婦トモ日々参詣シ、ソノ引続キ九日ヨリ

十三日迄私ノ村今吉田祖平元へ五日ノ間逗留セラレ数度法談法話ニアヒス、正円寺ハ瀬山へ出勤ノ念頃ニ御教化ニアヒ、ソレヨリ同寺へモ参リ、石州へモ同道致シ、円立寺ハ吉木村善正寺入出勤ノ中二三日参詣シ、トモニ手厚キ御縁ニ遇ヒ申候、

尋云、右三僧ノ勸方トソノ村葉王寺始メ世上一統ノ教導方ト全ク同コト也ヤ、又異リタルコトモアリヤ、

申上候、全ク同シコトニテ少モカハルコトナキト存候、

尋云、ソノ方トモ申合セ新講ヲ取企候由承ル、実也ヤ、

申上候、実ニテ御座候、

尋云、ソレハ何ノ頃誰人ノ發起ニテ取組、又講名何ト付タリヤ、

申上候、当五月私ノ思付ニテ同意ノ者トモ寄合ヒ日頃浅間シキ心中ヲ懺悔致シ度存相企候、ソノ名ハ木口サカシト名クヘシト云テ中ソレテハ全クイヤシクキコヘルト申スモノ、アリシユエ、懺悔講ト名ケ申候、

尋云、ソノ村葉王寺へモ申談シテ企タリヤ、

申上候、尔ラス、只我々計申合タル義ニテ候、

尋云、何度会合イタシタルヤ、

申上候、五月已来四五度寄合申候、

尋云、寄講ニソノ村惣講寺へ案内セサル例モアリヤ、

申上候、女中講ノ中ニ二三講モ御座候、

尋云、葉王寺へ案内シタルコトソナキヤ、

申上候、両度案内致シ候へハ、夜更ケ物語仕候テハ博益^{博美}杯取扱候ヤト世上ノ怪ヲ受ンコトヲ恐テ初両度案内致シテレトモ、口論カマシキコトニ出来シ三度ナカラ夜モ明ケ候へハソノ後無沙汰テ相營

申候、

尋云、惣講寺へ無沙汰シテ新講ヲ取結シ世上ノ見聞ヲ恐レテ藥王寺招ト云、タマ／＼法縁ニアヒナカラ両度トモニ論ヲ致シテ夜ヲ明スコト、甚以テ不審也、一味ノ安心ナレハ僧分ヲ相手ニ争論スヘキ由シナシ、共ニ法味ヲ聽聞スヘキ処ヲ却テ口論ニ及フコトハ元ヨリ法義カ異ナルユヘナルヘシ、如何ナルコトヲ申争ンヤ、ソノ次第ヲ具ニ云ヘシ、申上候、コノ節祖平カソノ相手ニテ私共ハ一向覺不申、祖平儀ハ此節病氣ニ付罷出不申候ヘハ、ソノ趣キ相分不申候、

談云、祖平病氣ニテ此席へ出スユヘニ分ラヌト云、祖平コトハ追而吟味ニ及ヘシ、ソノ方祖平二次テノ新義者トキク、已ニ藥王寺ヨリ差出セシ書付ニモソノ方ノ名カミヘテアル、尔ルニソノ論義ノ次第一向覺ヘスト申コト甚不都合也、ソレハ且ク聞ク、元來ソノ方ノ申ス如ク、三僧ト藥王寺ト実ニソノ勸方同ケレハ今度ノ故障出来スヘキ所以ナシ、若シ弥々相隱スニ於テハ近日 御使僧御下向アレハ仏護寺ニテ御取札ニ相ナルヘシ、尔ルトキハ 御使僧へハ元來ノ元村方ヘモ(空目) ヲ

カケ御国法ヘモ御苦勞ヲ備ヘ奉ルニ至ル、恐レ入次第也、仮令何ケ体ニツ、ミカクストモ已ニ祖平ト藥王寺ト論義一條ハ書附ヲ以テ具ニ申出テアレハ、法義ノ筋ハ能分テアル、ソノコトハ衆人ノ能知、又御国法ヘモキコヘテアレハコ、テ云ハネハ御場所テ云ハネハナラス、同行ノ身分ナレハ法義ニ付テハイカヤウノ心中カアリテモ心中ヲ不殘語テ改サヘスレハ御答ハナイ、ソノ方トモモ畢竟後世ノ大事ト思ヘハコソ不正ノ法義テモ聞タノテハナイカ、尔ハ出離ノ志ヲ云ヘハ奇特者ト心得ヘキコトナレトモ、殘念ナコトハ法義ノ筋カ悪キユヘニ吟味ニ及フモノナレハ回心サヘスレハ済ム也、世間悪事ストハ事柄替ルカラハ

子孫ノ恥辱ニナルコトモナヒ、ソレヲ強テ隱セハ止ムコトヲエス、御本山へ言上スルトキハ、大善知識様御尊慮ヲ痛メ奉恐入事テハナヒカ、則大罪人トナルヘシ、不正ノ法ヲ勸タ坊主ニコソ罪アレ、教ヲ受タ同行ニハ罪人ナヒ、ソレヲ隱スト大罪人トナル、爰ノ道理ヲヨク勸考シテコレ迄キ、エタ通りヲ具ニ語ルヘシ、異タ□ヲキカス者カ、当寺へ呼出サルヘキ訳ハナキ也、五人ノ者共此処ヲ能思案シテ明白有体ニ申出ヘシ、又今日引纏ノ役方ノ衆中モ右ノ次第ヲ篤ト相論シ一日モ早くコト済ニ到ルヤウニ取計ヒ下サルヘシ、

源太良

尋云、ソノ方昨日申聞セタ通り能思案ヲシタカ、
申上候、昨夕以來ヨク／＼勸考仕候処、ナルホト仰ノ如ク三僧ト藥王寺トハ勸方少シカワリ申候様ニ存ル、ソノ異ルト云ハ三僧ノ勸方ノ委ク候、

尋云、イカ、委キヤ、ソノ趣キヲ申出ヘシ、
申上候、先世上一同ノ御教化テハ信心ハ得易キモノ取易キモノトノ玉ヘトモ、三僧ノ申サレ候ハ、不尔、何ノヤフモナク何ノワツラヒモナクトアルハ如来ノ丸助ケヲノ玉ヒタモノテ、ソノ丸助ヲ信スルト云コトハ至テ六ヶ敷コト也、故ニ御経ニハ極難ノ信ノ法ト説テアル、元祖ノ御弟子三百八十余人ノ中テ只四人ノミ三信ヲエラレタ、蓮如サマハ国ニ一人カ郡ニ一人カト仰ラレタ、一往信ヲ得タ様テモミナ似セ者テ往生スルモノ此座ニ一人モナイ、時々ノ法義ニアフ位ナコトテハタトヒ十年廿年ヲ経テモ埒カ明カヌ、真実後世ヲ大事ト思フ志アラハ孫子ノ世話ヲハナレ家業ヲステ、日夜タヘス信心ノエラレル迄辛房(後カ)ヲスヘシト云テ、至テ親切ニ教ヘラレ候、又世上一

統ノ御勸ハ信スレハ往生シ安心スレハ參ラレルト心得ヨ、信ヲエタ
レハ夫婦喧嘩ヲシナカラモ極樂ノ道中也ト云云、正円寺等ノ申方ハ
不尔、信シテ往生ス、安堵シタテ參ルト思ハミナ我機ヲタノム処ノ
自力ノ信也、之ハ機安堵シ之ヲ贊持ノ領解ト云也、疑ハ晴レテモユ
ケス、晴処トモユケス、又安心ハシテモ參ラレス、セストモ參ラレス、
ソレハ疑ハアリテモナクモテ安心ハシテモ^{（堂）}セストモソコニ心ヲオ
クコトハナヒ、我胸トノ^{（堂）}止メテ只落ルハカリトシレヨ、落ル此身
トナレハ落シハセス、本願テ往生ハ如來カサセテ下サル、衆生ハ落
ル、仏ハ助ル、往生ハ如來ト御指向也、ソレユヘニ死ル迄ハ地獄ノ
道中一ノ息カ切レルト御助ケニアツカル也、又正円寺ノ言上ニ、世
上ノ人カ、ル地獄者カ如來ノ本願力テ往生スト心得安心シテオル、
又坊主モノソノ如ク教ルモノハ全ク邪見ト云モノ也、イカナル惡人
モ極樂往生ト談ノ極樂ヲハキタメニスル惡事ヲシテモカ、ルモノモ
御助ケト心得テオルハ極樂ヘ荷送ヲスルト云モノ、之ハ大間違ノ邪
言也、コレテモ參ラレルト云コ、ロヲ引カヘテコレテ參ラレヌト思
ヘシ、死ル迄ハ落ルトノミ心得テアレハ息カ切ルト如來カ參セテ下
サル也、衆生ノ參ルト思フ願心カヒツクリカヘラネハナラヌ、ヨク
キコヘヌトキハカ、ルモノカコレ也テ參ル^{（堂）}ト思テオル、之カ自
力ノ信也、ソノ者カヨクキコヘルト參ラレヌト思フ心ニナル、之カ
自力ノ捨タノ也、故ニ參ルト思フモノハ必ス^{（堂）}オチル、落ルト思
フモノハ必ス參ル也、私ノ聞取テアル処ハ如此ニ御座候、
尋云、ソノ方ノ云如ナレハ委キテハナシ、全テ異テアルテハナイカ、
申上候、一往ハ異タヤフニキコユレトモヨク^{（堂）}、聽聞仕ルト一ト
ナル、何モカハリハナシト存スル

尋云、信心ハ得難シ取難シト云コト、御文章ノ中ニ何ニアリヤ、
申上候、易往而無人ノ經文ヲノセラレテ信心ヲトル人ノ希ナルコト
ヲ仰ラレテアリ、常ニ此御文章ヲ以テ信ノ得難キコトヲ示サレ候、
談シテ云、八十通ノ御消息ノ中、信心ノトリ易キコトノミヲ念頃ニ示
シ玉フ、信心ノ得難キコトヲ示シ玉ヘルモノ一ヶ所モナシ、若アリタ
ナレハ我カ首ヲヤル、ソノ信心ノ取り易キコトヲ最モ親切ニ示玉ヘル
モノカ、彼易往而無人章也、引玉フ經文ハ易往ノ言カ入用也、易往ト
ハ他力極意ヲ顯シ玉フタモノテ、余經ニ絶テナキ不共ノ金言也、贊ニ
大聖易往トトキ玉フ等トアルカ如シ、尔ルニ此經文ヲ以テ難信ノ扱ト
シ御文ノ正意ヲ言ス、大ナル間違ヒ也、難信ヲツキ立テ、談スルモノ
ハ通途ノ教ハミナ機安堵機濟ニシテ眞實ノ信心テハナシ、眞實ノ信心
ヲウルコトハ極難ナレハ容易ニハイケヌ、ソノ処ヲ能ク教ルモノハ我
ノミナリト自談テ人ヲ錮タダミ、而シテ次第々々ニ毒ヲ吞マセル、之
カ不正ノ法ヲ勸ル序弁也、元來難信ト云ハ經末ニ出テ、道理成仏ノ法
ニ對シテ他力不思議ノ尊高ヲ嘆スル金口ニシテ機ノ趣入ニ付テ論スヘ
キコトニ非ス、ソレヲ右ノ如ク教導ノ大序トスルコト甚キ誤也、ソノ
方トモハソレヨキコト、思ヒテヨクキ、覺テオル、之カ法義ノ不正ナ
ル一ノ証拠也、得計ト勘ヘテミルヘシ、
尋云、往生ハ疑ノ有無ニモ安心ノ成不ニモヨラスト云トキハイカ、心
得タルヲ信心ト云ヤ、
申上候、オチルハカリノ我身トシレハ助玉フト安堵シテ喜フハカリ、
之ヲ信心ノ行者ト申也、
尋云、地獄者ト知タカ信心ジャ助玉フト安堵シタカ信心シヤ、
申上候、オチルモノヲ如來ノ御助ト安堵シタカ信心也、

尋云、尔ハ信シテ參ル疑ハレテ往生スト心得テモヨキヤ、

申上候、尔ラス、安堵ノ往生スレトモ安堵シタノテ參ルニハ非ス、
參ルノハ願力也、願力テ參ルト安堵シテ往生スル也、

尋云、イカ、心得テオレハ願力テ參ルヤ、

申上候、オチルトサへ思テオレハ願力參ル、オチル此身ト知ラレタ
処カ自力ノツキタノ也、自力ノケハ仏ノ他力テ助ルコトチラハ落ル
仏ハ助ル、オチルモノヲ助ルカ如来本願也、

尋云、オチル此身ト知タカ正因トナリテ往生スルヤ、

申上候、助ルハ仏ノ願力、衆生ノ方ニハ芥子ハカリモ參ルヘキ因ナ
シ、之二就テ常ニ一ノ譬喩ヲトケリ、タトヘハ斷罪ノ惡人ヲ国王ノ
大罪ヲ以テ助命アルカ如シ、罪人ノ心念ニ由テ助ルニ非ス、助ルマ

シキモノカ助ルソ、大王ノ慈悲ソレヲ聞トキハ只嬉キハカリナリ、
尋云、今ノ喩ノ如クナラハナラハ十方衆生信スル疑モミナコトク
往生スヘシ、尔ハ聞法獲信無益トスルヤ、

申上候、其義ハ今迄何トモ心付不申、私ノ心得タル、右ノ如クニテ候、
談云、陳スル処ニテ安心不正ノ次第、正ク次第ヨク分ル、此義ニ就テ
又委ク聞尋スルコトモアレトモ、之ハ明日ニスヘシ、

源太良

尋云、昨日引ク死罪ノ者ヲ助命ノアル喩ノ如クナラハ、機ノ方地獄一
定ナレハ疑ノ有無ニハカ、ハラス願力ノ全ル助ト云ハ、疑ナカラ往
生ト云コト也ヤ、

申上候、疑ナカラ往生ト申コトハ決シテナシ、素ヨリ地獄者ナレハ
罪障一トシテルルコトナシ、仏ノ願力ヲモ疑フ心アレトモ此俣ナカ
ラ往生ト信シテミレハ疑ノ思ハ少モナシ、疑アリテハ往生叶ハヌ、

思ヘハ疑マス、起テイツ迄モ疑ヲ小レキヌ、ソコテ引カヘテカ、
ル疑深キ私モ願力往生ト信シテミレハ疑ハナキ也、

尋云、疑ナカラ往生ト信シタ処ノ信ナレハ信心ノアリタケカ疑也、故
ニ一期ノ間疑ハ止ヌ道理也、ソノ方ノ心中ニ実ニ疑ナキヤ、

申上候、我機ヲ詠レハ地獄一定ナレハ疑アレトモ、ソノ者ヲ助ケ玉
フカ仏力ト仰テミレハ、歎クコトハナキ也、疑ノ起ルソノ中ハカ、
ル疑深キ私モコレ也ノ御助ト喜ハカリニ候、

談云、コレテ三僧ノ教導フリハヨク分テアル、其方ハ余程出離ノ心掛
ケカ厚トミヘテ法義筋ヲ委クキ、トリテオル、ソノ志ヲ云ヘハ貴キコ
トナレトモ、悲哉不正ノ陥阨ニ落入テアル也、

直右衛門

尋云、其方ハ三僧ノ教導方ト藥王寺ノ勸方ト同コト、思ヤ、
申上候、私ハ右ト左トノ異アリト存スル、源太良ノ申ス処ト私ノ聞
タル処ト全ク同シコトニ候

尋云、ソノ中テハ右ノ道カヨキ思カ、左ノ道カヨキ思ヒカ如何、
申上候、私ハ未タソノ分別ナシ、実ハ途中ニフラツキテ居マス、併
シナカラソノ中正円寺ノ勸方カ正義ノヤウニ存スル、

甚三郎

尋云、ソノ方共ハイカ、心得テ居ルヤ、
幾次
弁藏

申上候、私共直右衛門ト同様ニテ未タ此分カ正義ニテ此ノ如クハ
フ解ト云決定心ハコレナク候、
談云、先日ヨリ源太良ヲ取約シテ法義ノ筋目ヲ推極ルニ、正ク不正義

也、ソノ方トモハミナ邪路ニ陥テアル、元來此説ハ宝曆ノコロ長門老僧円空ト云モノ、弘メタル辟法門ニテ当寺石州ニ大ニ蔓テアル由シヲ聞ク、此山県ニモ右ヨリ四度弘ル、甚タ歎ケ敷コト也、此説ヲ世上ニ信機秘事疑心往生ト名ル、ソノ謂レハ二種深信ノ中信機ノ一ヲ誤認テ地獄者トサヘ知レタラハ仏ノ願力テ助ルト云、又疑心ハアリテモ御助ケト信スレハ疑心ナクナル^(マ)テ往生スト云カユヘナリ、二種深信ノ御定判ニソムキ、信心正因ノ宗ヲ害ス、他力真宗ノ肝要タルトム一念ノ信心ヲ欠テ教ル大邪義也、先年加茂郡竹原町芳蔵ト云者、此説ヲ学テ大ニ人氣ヲ動タニ由テ、同所照蓮寺・宝泉寺ヨリ御使僧横超寺殿ヘ出願セラレ、御取糺ニ相成タ、即正満寺恵海膺満・弘願寺円識膺満并拙僧ヘ御用掛リ仰付ラレ、御吟味ニ及ハセラレタ処、右ノ信機秘事也、此度聞札タ処、彼ト全ク同大善知識様御正化ニ背キテアル、不正ノ証拠ハ汝等ハ法義ニ於テ表裏ヲナス、表向一往正義ヲ述テ三僧ト薬王寺トカハラスト云、再往吟味スルト全テカハル、ソノカハリテアル安心ハ間違ナレハ速ニ改心シテ御正意ニモトツケヨ、出離ノ大事ナレハ我慢ヲ離レテ篤ト考ヘ、実ニ改心スルト云コトナレハ、教諭ニ及ハハコレ切ニ事カ済ム也、若シ得心セサレハ止ムコトヲ得ス、出願ニナレハ必ス御使僧様ノ御取糺ニ相成ル、深ク思案シテ明朝申出スヘシ、

廿三日、組頭役忠三良・謙蔵兩人ヲ以テ、右五人ノ中源太良一人ヲ除キ、余ノ四人ハ速ニ改心シ教諭ノ義ヲ申出ル、由レ之、同日教諭ニ及ヒ四人ノ者共ハ事済ニ相成、

九月廿四日、溝口村正円寺僧鑑ヘ申渡事

正円寺僧鑑

尋云、御自分義ハ石州願楽寺ヲ知レリヤ、
答云、私ハ元石州ノ産ニシテ彼ト同国、殊ニ近在^(山根)□ヘヨク知ル処也、
尋云、願楽寺当郡ヘ入込シハ何頃ニテ何レノ処ヨリ始テ何寺出勤セシヤ、

答云、当四月三日初テ拙寺ヘ引受、ソレヨリ処々十ヶ寺余モ巡寺シテ法談法話致サレ候、

尋云、願楽寺ノ教導方ハ正不^(正不)如何之義不評アルエツキ私先年

答云、勿論正統ニシテ教導方最好シ、同人義不評アルニツキ私先年彼ヲ取折ン為ニ参詣シ、四五日モ逗留^(逗留)シテヨク聴聞仕候処、少モ疾ナクシテソノ論シ方念頃ナル故、深ク帰依致シ候、

尋云、当四月其寺ヘ引請ノ節ハ申ニ及ハス、外寺ヘモ参詣シテ法談法話ヲヨク聞レタルヤ、

答云、円立寺ヘ二宿致シ、ソノ外蓮光寺ヘモ参リ数座聴聞致シ候、
尋云、ソノ教導フリ、当国衆僧ノ法談法話ト全ク同シキヤ、又少ニ異ナル処モアリヤ

答云、全ク同シテ少モ異ルコトナシ、

尋云、ソノ異リナキ教導ニテ人氣ノ動キタルモノハイカン、

答云、何レ処モ人氣ノ動キタル処ハナシ、尤モ岩戸辺ニハ明円寺ノ破斥ニ依テ少々兔ヤ角申モノモアルカノ由、之ハカスナラス、
尋云、大田辺ハ大ニ動キテアル由シ、之ハ云何、

答云、先日私シ大田辺ヘ出勤致シ候ヘトモ、氣動ノコトハ決シテキカス、役人ノ中帰依ノ人モアリテ、他国僧一統停止ニ也タレトモ、願楽寺ハカリハ格別ヲ以入郡ノ義願ヒ取タキ由申サレ候、

談云、何ノ処ノ里モ氣動ナシトハ云何、山県ノ諸村、法義ニ付テ人氣

ノ動キタルコトハ城下ヲ始メ他郡ヘモ聞ヘテアレハ、ソノコトハ已ニ明也、於中別シテ大ニ動キタル処ハ、大朝・新庄・大塚・宮廻等也、昨日、新庄村小田寺ヨリ客僧送り人足当寺ニ来リ、其村辺氣動ノコトヲ具ニモノ語ル、拙僧親シクコレヲキク、又今吉田ニハ不正ノ輩、葉王寺ト口論シ治リ難ニツキ、同寺ヨリ申出ニ相也、コノ節聞約シテニ及処、正ク不正義也、此度拙僧当寺ヘ入込シハ、先月宗判ノ砌り法中示談ノ上御用掛リヨリ安養寺ヲ以テ申来リシ故也、氣動ナキニ宗判ノ節法中ノ示談アルヘキ謂レナシ、畢竟人氣ノ動ハ動ス者ノアルユヘ也、ソノ動カスモノハ願樂寺并二帰依ノ人々ナルヘシ、人氣ノ動クヲ以之ヲミレハ教導ノ不正ナルコトハ勿論也、不正ノ願樂寺ヲ正義ト云、氣動ヲ氣動ニ非スト云モノハ元来願樂寺ヘ帰依ノ故ナルヘシ、甚以不審也、尔レハ此俣ニハ捨オカレヌ、若捨オクトキハ人氣カ治ラス、幸ヒ近日 御使僧ノ御下向アレハ言上申サハ定テ御取糺ニナルヘシ、法門ノ正不ハソノトキノ御決断ニアル、依之ソノ節迄ハ法談法話■自ラ指扣ヘラルヘシ、

申上候、御不審一往御尤ニ候ヘトモ、私ニ於テハ不正トハ存セス故ニ自督并教導方具ニ申述度、何卒御聞取下サルヘシ、

答云、此義ハ相断ル也、何トナレハ先日ヨリ今吉田ノ者モ聞約ルニ悉ク表裏ヲナス、之カ不正ノ法義ニ泥ム者ノ習シ、口ニ説モ筆ニ顯モ正義ヲ述テ、而シテ密ニ邪義ヲ勸レハ、■ノ詐者ヲ出サネハナラヌコト容易ナラヌ、今貴僧ノ述ルモ又正義ナルヘシ、若シ之ヲ糺サントスレハ多ノ証者ヲ出サネハナラヌコト容易ナラス、依レ之今ハキカス、何レ 御使僧前テナケレハ明白ニハ分ラヌ也、当月十日ノ御出京ナレハ最早兩三日ノ内ニハ 御下向アルヘシ、今少ノ間待玉ヘ、

申上候、願樂寺帰依ノ人ハ外ニモアリ、尔ルニ私一人ニ差扣ヲ申付ハ如何、

尋云、願樂寺帰依ノ人ハ外ニモアリト申サル、ソレハ誰レ也ヤ、答云、円立寺・蓮光寺・円立寺弟子諦聴・明法寺等也、

談云、余人ノ義ハ追テノコト、此度御自分ヲ右ノ如ク取斗フ次第ハ領法御制禁ノ他僧引受ノ根元ハ其寺也、殊ニ昇階ノ身分トシテ不正ノ僧ヲ明僧知識ノ如ク申触セシニ依テ外寺ヘモ相招キ、大ニ人氣ヲ動ス、願樂寺ノ罪ハ正円寺ニ帰スル、当郡氣動ノ張本トモ云ヘキ人体ナレハ先一番ニ指扣ヲ申渡オケモノ也、併ナカラ此ニ付テ必ス忿怒セラル、コト勿レ、先年西養寺雷振御答ノ節、我慢ヲ募リ終ニ法談法話御指留ニ相也タリ、カ、ルトキハ心顛倒シテウロタヘ必ス仕損スルモノナレハ、ヨクノ思案アルヘシ、尚又願樂寺ヲ引受ノ寺并二帰依ノ人書認テ指出サルヘシ、

- 正円寺ヨリ書ス願樂寺引受ノ寺
- 溝口村正円寺 大朝村円立寺 宮廻村蓮光寺
- 新庄村小田寺 大塚村専教寺 戸川内村常慶寺
- 戸川内村専正寺 同 道教寺 上殿 宗玄寺
- 上殿 明国寺 加計 正念寺
- 外ニ帰依ノ人
- 円立寺弟子諦聴 下村明法寺 高野村尼 妙光

(空白)

奉差上御請書

一私共儀石州閑居堂当郡正円寺・円立寺相勸申候不正之法儀二帰依いたし、異儀固執之心底分当村薬王寺始め手次檀寺（那脱之）其外此辺御僧分御教導都而間違と相心得、俗徒之身分として色々雑言申触候、其上当五月已来我々とも申合せ新講取企、数多寄合通夜法話仕候段、彼之不屈之次第数多御座候（トコ）、此度

大善知識様深重之思召を以、右心得違ひの條々 御手厚御教諭被成遣、就中当四月他国僧閑居堂素平宅相見候付法談法話仕、及病動候儀者唯御寺法而已ならず、御国法二茂相背き不埒至極嚴敷御呵り被為在、兎角可申上訳無御座候、重々奉恐入儀二御座候、向後心中相改、御相承之御安心篤と聴聞いたし一同睦敷御法儀相続可仕旨御念頃二被 仰聞難有奉思候、此上自然右体心得違之儀相聞候ハ、如何様之咎め被仰付候とも聊申分無御座候間、此段宜敷被 仰上可被下候、依而御請書一札奉差上候、以上、

今吉田村

巳十月

源太郎

甚三郎

直右衛門

幾次郎

弁藏

証人 見藏

同 忠三郎

宗法御用掛り

明泉寺様

奉差上御請書

一私共石州願行寺（マ）・閑居堂当郡正円寺・円立寺相勸め申候不正之法儀二帰依いたし、異儀固執之心底分当村薬王寺始メ手次檀寺其外此辺御僧分御教導方都而間違与相心得、俗徒之身として色々雑言申触、其上当五月已来、我々共申合、新講取企数度寄合通夜法話仕段彼是不屈之次第数多御座候、此度大善知識様深重之思召を以、右心得違之條々、御手厚御教諭被成遣、就中当四月他国僧閑居堂留置き法談法話仕、動及騒動候儀者、唯御寺法而已ならず御国法二も相背不埒至極嚴敷御呵り被為在、兎ル申上訳無御座候、重々奉恐入儀二御座候、向後心中相改メ御相承之御安心篤と聴聞いたし一同睦敷御法儀相続可仕旨御念頃二被仰聞難有奉思候、此上自然右体心得違之儀も相聞候ハ、如何様之御咎被 仰付候とも聊申分無御座候間、此段宜敷被 仰上可被下候、依而御請書一札奉差上候、以上

今吉田村

巳十月

素平

同人妻 きよ

証人 組惣代 見藏

宗法御用掛り

明泉寺様

同 忠三郎

外吉

むら

ふさ

民平

明泉寺様

八右衛門

みな

冬夜独語

たよ

一、ソレ我芸州ハ一派ノ門葉充滿シテ他力真宗ノ昌ナルコト余ニ及

きよ

フ国ナシ、中古尊者（無考）惠雲ナル学匠アリテ大ニ宗乘ヲ開ク、ソノ門下

与八

ニ大瀛・僧叡・大運・雲幢等ノ十有余人共ニ達学高德ニシテ蘭菊美

七藏

ヲ競フ、於中尊者大瀛ナルモノハ往時安心惑乱ノ砌　法王ノ明ヲ

多藏

奉シテ金鉉ヲ揮テ邪徒ヲ討ツ、英名天下ニ輝キ宗侶ソノ恩ヲ荷フ、

庄助

コレ吾国ノ名譽ト謂ツヘシ、如此学者ノ徒弟連綿トシテタヘス大法

ちい

護持スルヲモテノ故ニ今日ノ雛僧野俗モコト々々正路ニ歩ス、凡

瀧平

ソ郡国ニオヒテ今家安心ノ一味ナル我国ニ如クモノナシ、世ニ安心

勘四郎

国ト称スルモ宜ナル哉、然ルニ山県一郡ニ局テ此ヲ誤ルコト数度ニ

みき

及、コレソノ由来アリ、今ヨリ凡ソ百年前宝曆ノ頃長門国萩城下松

保右衛門

本町妙光寺ノ弟子円空ト云ヘル僧有テ自ラ長門老僧ト称ス、疑雲

ひて

永晴弁・浄土略要抄等ノ書ヲ著述シ新義ノ邪説ヲナシテ愚俗ヲ誑惑

みわ

ス、世ニコレヲ信機秘事・疑心往生ト名ク、コノ説愚者ヲ誘ヒ世財

いなばや

ヲ鈎ルコト最モ妙ナリ、此新義ヲ学ヒ得テ俗間ヲ徘徊スルトキハ金

内

銀ヲ抛ツコト土石ノ如クナレハ、貧僧乞人モ不日テ富ム、此故ニ古

右之者共此度

今僧俗鈎財口腹ノ為ニ動モスレハコノ邪院ニ陥ル、彼円空石州ニア

御教諭被下、速ニ改心仕候旨申出候ニ付、小内聞約メ候処、無間違

御座候、依而此段申上候、以上

ルコト久シ、ソノ隣ナルヲ以テ時々山県ニ来ル、大朝村教信寺門徒

大塚村

同村甚兵衛夫婦深ク此ニ帰依ス故、来ル毎ニ宿スルコト数日ソノ後

巳十一月十四日

円泉寺

彼夫妻暇ヲ乞テ円空ト共ニ国ヲ出テ、宗祖ノ旧跡巡礼ス、北国ニ往

宗法御用掛り

国平

キ尼トナリテ名ヲ合妙ト改ム、宝曆十辰年十一月円空本山ノ囚人ト

ナリ克問ニ値テ終ニ落罪シ法ニ処シテ禁獄セラル、コノ時尼合妙ハ

改心シテ歎状ヲ上ルヲ以帰国ヲ許サレケリ、如此円空數日往返スルヲモテノ故ニコノ僻法アリ、コレ一國八郡ノ中夕、山県ノミニコノ異法アル所由ナリ、ソノ後寛政ノ頃大朝・新庄・宮廻等ノ諸邑コノ説起テ惑亂ス、学匠大瀛宮廻蓮光寺ニ於テコレヲ退治ス、ソレヨリ廿余年ヲ経テ後奥山ヨリ起テ大朝新庄等ノ諸村大ニ動ク、当寺高名ノ諸者広島善正寺力ヲ尽シテコレヲ破斥ス、ソノ書記現在ス、カノ記事ニ云ク、文化九年申二月卅日芸陽善正寺手記ト云云、是ニ依テコノ邪僻伏スルコト卅余年ナリ、爰二十ヶ年前ヨリ石州簡古堂ト云ヘル邪僧來テ俗間ヲ出入シテコノ法ヲ勸ム、素ヨリ習氣アルノ地ナレハコノ縁ニ催サレテ多萌芽ヲ生ス、又三四年前ヨリ同國願樂寺ナルモノ諸邑ヲ回勸シテ専ラ撫育ス故二月々日々ニ繁茂シテ今ハ奥山大田中筋大朝筋大半已ニ歸スル、当今石州ヘ往來スルモノ夥シキヲ見テ知ヘシ、此度コレヲ攻メ平ケスンハ再ヒ製シカタキニ至ラン可恐く

一、山県溝口正円寺住持僧鑑ハ本山学館ノ得業ナリ、石州ノ産ニテ素ヨリ同國願樂寺ニ歸依ス、今年安政四丁巳四月上旬ニ願樂寺ヲ請シテ一会ヲ設ク、コノ時僧鑑カレヲ名僧知識ト讚嘆シテ頂礼恭敬スルコト恰モ釈尊ノ如クナレハ、声名四方ニ布キ、ソノ高德高クキコエ遠近ノ老若馳集リ、随喜渴仰ノ輩甚多シ、依レ之円立寺・蓮光寺・小田寺十有余を巡寺勸談ス、願樂ノ勸メタルヤ心学道話ヲ信機ニ雜説シテ宗意ヲ害シ、賤劣ノ道歌ヲ法筵ニ謳ハシメテ行儀ヲ汚ス、全ク異徹ニシテ努メテ他ノ僧俗ヲ破スレトモソノ安心ニ至テハ秘シテ語ラス、ソノ言ニ云芸州ノ坊主ハ野夫医者ナリ、法談法話ハ撫付ケナリ、同行ハ瓦礫多ナリ居リナリ、安心ハ機安堵ナリ、機濟シナリ、

阿房他力馬鹿他力ナリ、説者モ聽者モ法ノ実義ヲシラス、全ク邪見ナリ、外道ナリ、如此ノ安心テハ往生ハ叶ハヌ、コレマテノ信心ハ後生ノ間ニハ合ハヌ、ナケテシマヘ大田川ヘ流セイト、悪口雜言シテ人氣ヲ動カス、ソノ人氣ノ動クヲ御浮キ立チト唱ヘテソレヲ我功名トス、有志ノ同行來テ正統ノ安心ヲ出言シテ法話ヲ乞ヘハ、ソノ安心ハ邪見自力ノ信心ニシテ地獄ノ因ナリト貶斥シテコレヲ驚セトモ、我カ安心ヲハ説カス、頼リニ請ヒ責ムルトキハ答云、極難信ノ法ナレハ容易ニ聞ヘキコトニアラス、真実ニ求法ノ志シアラハ今日ヨリ世事ヲ捨テ、我レニ從ヒ五七十日モ終日通夜シテ法話ヲキクヘシ、ソノ内ニハ必ス信ヲウヘシト云云、依之家業ヲ捨金銀ヲ費シ常隨スルモノ數十人タヘス、ソノ教ヘノ如ク久ク昵近シテ金銀ヲ惜マス施シ、予ヲ仰信スルヨリ見ルトキハ密ニ安心ヲ伝授ス、ソノ法即カノ円空秘事ナリ、其所行惡ムヘシ、タ、世財ヲ奪フノミナラス、復人ヲシテ万劫ノ大事ヲ失ハシムル法賊ナリ、スヘカラク頭ヲ八分ニシテ他方世界ニスツヘシ、而ルニソノ邪僧ニ歸依隨順セル衆僧力ヲ尽シ思ヒ凝シテ邪路ヲ開ケハ、タトヒ他國ノ願行簡古ハ入ルコトアタハストモ自國ノ邪徒アラハ異義日ヲ逐テ蔓リ終ニ一國ノ害トナラン、ソレコレヲ如何セン、

一、今般異安心ノ族、龍原山ニ在テ殿使糺明アルヘキ條、已ニ法主ノ尊命下ル、此ニ就テ我レ苦慮スル処口アリ、ソノユヘハカノ邪僧共ハ法談法話ニオヒテ自ラ表裏ヲナス、表ニハ正路ヲ説、裏ニハ邪義ヲ勸ム、常ニ問道ノ工ミヲナセハ、コレヲ虜トスルコト甚カクシ、若シ人アリテソノ説ヲ責ルトキハ表ニ託シテ裏ヲカスク、ソノ逃ルニ道ナキトキハ聞誤トシテ聽者ニ負セテサケル、又歸依ノモノ

ニモコノ術ヲヨク口授ス、裏ノ実ニ至レハ首ハキレテモ語ルコトナカレ、命ハ召サレテモ云ハシト堅ク約シテアレハ、他人問尋スルトキハタ、表ノミヲ云テコノ外曾テカカスシラスト答、是ノ如キ異義固執ノ徒ナレハ、着衣ノ身分トシテ如何体ニ糺明ストモソノ実状ヲ吐露セシムルコトカタカルヘシ、且彼等種々ノ奸智ヲ回ラシテ自國ノ断場ヲ出テ、京師ニ此ヲ裁判セラレンコトヲ計ルヘシ、何トナレハ芸ト京トハ路程百里ヲヘタツレハソノ状詐リヤスク日ヲ重ネ財ヲ費スコトヲイトヘハ、ソノ証者トナルモノナシ、邪僧ハ一生懸命ノ地婦依ノ徒モ亦碎身シテコレヲ助クレハ年ヲ累ネ財ノ消ルヲコト、セス、故ニ邪力強ケレハ正ハ自ら勢ヲウハル、此ニ於テ裏ノ実ヲカクシ無事ナラハ異法マス／＼榮ヘシ、我深ク歎息スル処也、

一、邪徒等異ヲ弘ルニソノ奸計ヲナス邪義ノ僧俗合体シテ俗分ノ長タルモノ一兩輩売客ト化シテ処々ヲ間行シ適行者ノ家ニ泊リ通夜法話シ種々ニ言ヲ構ヘテ世上僧俗コト／＼ク真実信心ヲシラサルコトヲ慨歎シ、漸々ニ異法ヲ説与スヘキ前序ヲナス、是ヲ聞モノ必ス驚ク、ソノ氣ノ動クヲ見テ某ノ僧コソ名僧知識ナレトカノ邪僧ヲ知識^{〔カカシ〕}欣慕ノ心ヲシテ切ナラシメテ去、而シテカノ邪僧ニ通ス、邪僧コトニ託シテ密ニ行テ宿ル、此ニ於テ馴レ泥ミ互ニ法類ノ契リヲナス、ソレヨリ或ハ共ニ往キ或ハ独リ往キ数々往來シテ異法ヲ勸示スレハ、ソノ毒次第ニ伝シテ終ニ党ヲナスニ至ル、故ニ顯ニハ見ヘサレトモ隱ニハソノ毒内攻シテ害ヲナスコト最モ甚シ、当時山県ノ諸村ハ勿論、ソノ余佐伯高田高宮ノ中往々コレアリ、

一、邪路ヲ切斷スルニ一挙三徳ノ良策アリ、云ク、異義偏執ノ魁タル者二三輩官府ヘ囚ヘ玉ヒテ不正ノ法ニ泥ニ俗分トシテ人ヲ勸メ人氣

ヲ騒カセシ罪條ヲモテ乍チ獄ニ下シ、而後嚴密ニ切磋商アラハ何ソ隱スコトヲ得ン、秘事ヲ白スコトハ必セリ、ソノ上某僧ハ如此トキ某僧ハ如斯ス、メ幾許ノ金子ヲ入レテ興義ヲウケ、往生ノ券ヲ得タリナト子細ニ白状スヘシ、コノ一挙ニ三徳アリ、一ニハ俗徒已ニソノ状ヲ陳スルトキハ邪僧ハ責メスシテ落罪スヘシ、二ニハ此事此上ニ流布セハコレヲキク邪徒恐怖シテ忽チ改心セン、三ニハ後世異義ヲ討ノ法トスヘシ、コレ誠ニ不正ノ法義ヲ驅除シ世人ノ迷惑ヲ開語セ^{〔開語セ〕}シムルノ活計ナラン、往年寛政文化ノ度吾一流安心^{〔開語セ〕}乱ス、疑雲眞月ヲカクシ法賊蜂ノ如ク起リ、ソノ極ツキニ千才ニ及ヒ宗意殆ント危シ、法主モコレヲ云何トモシ玉フコトアタハス、由テ 関東ニ訟ヘ玉ヘリ、官吏脇坂淡州侯新古正不ヲ研尋シテ明白ニ決斷シ玉ヘリ、今日正法ノ一天ニ存生セルモノハコレ偏ニ公恩ナリ、坂公ノ明判モ亦千載ノ美談トナル、仏ノ言ク、我仏法ハ國主大臣ニ付属スト、誠哉、仏法ハ王法ニ由テ立ツ、王法モシ無レハ仏法何ソ存セン、モロ／＼仏法ヲ行セン者ヨロシク王侯大臣ノ嚴政ヲ奉持シテ仁化ヲタスケ、以テ國恩ヲ謝スヘシ、努力^{〔努力〕}矣、仏子々々々々、古キヲ以テ今ヲ思フニ亦尔ラサランヤ、我國ノ郡大尹モシ一挙三徳ノ計ヲ用テ速ニ法賊ヲ討玉ハ、百性一朝ニ安堵セン、一國平安ナラハソノ化遠近ニ及ヒソノ功郡國ニ賞セン、此亦芸州ノ名譽ナラスヤ、將コレヲ條録シテ後世ニ遺ラハ仁慈遐代ニ流レ門葉君恩ヲ仰ン、吾冀フ所ハ唯在乎斯已、噫乎噫乎、

安政四丁巳十一月

此書ハ豊田郡忠海村明泉寺助教護命師著之玉フ、尔ルヲ曇雷公(当国

都賀上野村高善寺弟子也、同伏谷村産、後備後三次郡畑敷村西善坊へ
入寺、拙与同門（龍社）ナルカ、宗意取迷ノ僧俗龍原山へ被 召出、
御糺明之節、同志ノ中惣代トシテ 御使僧御見舞ノタメ広島へ出浮ノ
節、写得シ、帰リタル後拙亦（レ脱カ）コヲ写得トシタルモノ也、護命師ハ当
国祖式村善正寺住職慈雲得業ノ兄也、法儀一件ニ就テハ魁タル心配ハ
祖式善正鱒淵高善寺深涯得業大江明円寺覈現得業等也、

（了）

（謝辞）

本稿はJSPS科研費JP25K04440の助成を受けたもの
です。